

# 感動一点の場

『熊と仔馬』

1953年 小川原 脩 画

昨年の夏、この作品が『北海道のお土産物として定着した木彫りグマの歴史を紐解く』という、なんとも興味深い専門書※に取り上げられました。

芸術学の側面から、絵画のモチーフやイメージの中のクマに着目してみると、北海道の画家たちは北海道らしさ、北方らしさを表そうとして動物というテーマに行きつくケースも多く、多くの動物画が描かれてきたそうです。

ところが、北海道を代表する動物として多くの人々が認めてきたにも関わらず、ヒグマの作品はあまり見当たらないといえます。そのような中、珍しくヒグマを描いた例として小川原脩の作品が登場し、「たおれた仔馬のかたわらで、茫然と佇んでいるかのようなヒグマの姿。ヒグマとウマの関係は判然とせず、捕食者と被捕食者のようにも、なかま同士のようにも、まったく無関係な他者のようにも見える。かわいらしさとも違う。かといって、おそろしさとも違う。寂しげな背景ともあいまって、哀愁とただならぬ不穏さが漂う、独特のヒグマ表現である」と著者の一人、今村信隆さんは述べています。

1950年代初めごろ、北方的風土にモチーフを求め、キュビズム（立体派）を強く押し出した時期の作品だ…と解説することの多い本作ですが、描かれたヒグマに「木彫り熊」が重なって見えてきます。

文：沼田 絵美（小川原脩記念美術館 副館長）



※「開講！木彫り熊概論 歴史と文化を旅する」（2024年発行）は、町公民館図書室で読むことができます

## ふるさと探訪

### タッピングナイフ

502回

写真の資料は、厚手の包丁の先に太い鉤が付いている「タッピングナイフ」と呼ばれる特殊な農具で、ビート（甜菜）を収穫する時に使用されるものです。

大きさは全長が42センチで、刃の長さが26センチ、刃の幅が6センチ、刃の背厚が2ミリのりになり、刃の先には、長さ13センチで先端をとがらせ手元側に曲げた鉤が付いています。この鉤は、刃の先端部分を細長く切り抜き、鉤の後ろに切れ込みを入れ差し込むように装着し、鉤の頭にねじ山を付けてボルトで締めています。そして刃の左側には、これを製造したお店の屋号が刻印されています。

昔のビートの収穫は、馬やトラクターで掘り起こしたビートを、このタッピングナイフの鉤を突き刺して持ち上げ、包丁部分でビートの茎葉を切り落として収穫しました。

現在は機械がメインで、トラクターに取り付けた器具を使ってビートの茎葉を切り落とした後、ビートハーベスタという機械でビートを掘り起こし、土や泥を落として収穫していますが、タッピングナイフは農業機械で収穫できない畑の隅や、積み上げられたビートの山を整える時などに使われています。実は現在でも販売されている農具で、ビートを栽培する農家では大切な農具の一つです。

文：今井 真司（倶知安風土館 学芸補助員）



タッピングナイフ

## 展覧会のお知らせ

### ■第1展示室

開館 25周年記念第66回麓彩会展

1958年、小川原脩ら8人の発起人により創設された「麓彩会」。倶知安にゆかりのある作家たちの近作を紹介します。

会期：開催中～2月2日(日)

小川原脩展「アジアの大地」

小川原脩は晩年、アジア—中国桂林・チベット・インドへ旅し、鮮烈な印象を作品にしました。悠々とした大地、人と動物たちが繰り広げる豊かな時間が紡がれる絵画世界をご覧ください。

会期：2月8日(土)～5月11日(日)

### ■第2展示室

林 雅治展「WORK 土でつくるもの」

京都府出身で町内在住の作家・林雅治さんの陶による造形作品を展示します。

会期：開催中～4月13日(日)



## アート・イベントのお知らせ

### ■土曜サロン

ギャラリートーク

小川原脩展「アジアの大地」の作品を、学芸員が楽しく解説します。

日時：2月8日(土)14時～14時30分

会場：第1展示室（無料）※予約不要 講師：沼田絵美（副館長）

おとなの手しごと (31)「パステルアート作品を作ろう」

オイルパステルを使って、線を描いたり色を塗ったりするワークショップです。誰でも簡単にアート作品が作れます。

日時：2月22日(土)14時～16時 会場：ロビー（無料）

講師：沼田絵美（副館長）、金澤逸子（学芸スタッフ）

定員：10名※要予約、高校生以上、親子可

予約受付：電話申込（☎21-4141）

## 倶知安風土館のお知らせ

### ■エントランス展示「倶知安の農業【ビート編】」

倶知安の風物詩であるじゃがいも畑ですが、輪作の大事なパートナーになっているのがビート（甜菜）です。風土館が所蔵しているビート収穫道具を皮切りに、ビートという植物や砂糖の歴史、作り方などについて紹介します。皆さんのビートエピソードをぜひお寄せください。

会期：2月1日(土)～ 会場：1階エントランス（無料スペース）

### ■年中行事「ひな人形」

1階エントランスと人文展示「すまう」にてひな人形を飾ります。

会期：2月5日(水)～3月5日(水)（啓蟄）

会場：1階エントランス（無料スペース）および人文展示

「すまう」

# ミュージアム 通信

小川原脩記念美術館 ☎21-4141

観覧料：一般 500円(400円)

高校生 300円(200円)

小中学生 100円(50円)

倶知安風土館 ☎22-6631

観覧料：一般 200円(100円)

高校生以下、美術館観覧者無料

開館時間は9時～17時

入館は16時30分まで

※（ ）内は10名以上の団体料金

2月の休館日 毎週火曜日、展示替えのため美術館のみ3日(月)～7日(金)、

振替休日のため12日(水)

※11日(火)は祝日のため開館

8日(土)は展覧会初日のため美術館観覧無料、15日(土)・16日(日)は雪トピアの協賛のため両館を特別料金(団体料金)で観覧できます

### 絵画で見る炭鉄港 三人展

さすがに師走、さすがに倶知安。

年末の忙しさとドカ雪に阻まれ、ほとんど町外に出掛けられませんでした。以前から楽しみにしていた小樽美術館の展覧会は、どうにか最終日に観に行くことができました。

「炭鉄港」は北海道の近代化を支えた三都の物語。空知の炭鉱、室蘭の鉄鋼、小樽の港湾、これらをつなぐ鉄道にまつわるストーリーであり、本展はそれぞれの地域にゆかりのある三人の画家の展覧会です。

当館の麓彩会展に毎回出品されている羽山雅倫さんがその中の一人。小樽の情景を描いた幻想的な色彩の作品を見ていると、つい絵の中に入り込んでみたくなる思いに駆られます。また、伊藤光悦さんの描く夕張の廃虚の移ろいや、輪島進一さんの鉄と人体の融合を題材とした作品群もそれぞれ独創的であり、大変見応えがありました。

やはり美術館に行くと、心が満たされます。皆さんもぜひお気軽に当館へお越しください。

館長 福原秀和